

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ15
両面亀甲の組紐と模造・奉納の記

日本風俗史学会 會員 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会 会長

重要文化財の紫裾濃鏡は、享保四年（一七一九）六月二八日の「武州御嶽権現内陳（陣）神宝目録」には「卵花をどし御鏡」「日本武之尊御召と申伝候」とあり日本武尊の鏡とされています。明治三二年（一八九九）八月一日、いちちはやく国宝に指定。鎌倉中期初頭の洗練度の高い制作です。

紫裾濃鏡は、享保一九年（一七三四）四月に始る八代將軍吉宗二度目の神宝上覧では、七月初めから翌二〇年一月迄半年間江戸城に留め置かれ、付属の緒は享保二〇年一月三〇日最後の返却でした。同日の神社奉行からの返却状には「日本武尊鏡之胴付添

候平打之緒壹筋（將軍の）御用付被御留置候」（金井家文書）とあり、その緒こそ、紫裾濃鏡の胴に付いていた「両面亀甲の組紐（緒）」です。

それは平組の表裏両面に色変りの亀甲模様を交互に組み出す高度な技法と洗練された意匠の複雑な組紐（緒）です。

両面亀甲の組紐はもと、①紫裾濃鏡の胴の長側（胴の小札板四段分）一段目の馬手（右）後方の端の引合に、②三段目に繰縮緒として一尺三寸の長さで、③長側の最下段の馬手後方の端の胴先のわなが切れて六寸の長さで、④同じく馬手前方の端の胴先緒として残っていました。（享保一一年九月四日、下方貞親の

観察記録「武州御嶽山鏡之図」

現在、両面亀甲の組紐は、御嶽山以外では、1奈良春日大社蔵国宝梅金物赤糸鏡の胴先・繰縮緒等、2静岡三島大社蔵国宝梅蒔絵手箱の緒、3和歌山熊野速玉大社の国宝神宝装束類の緒が知られるのみです。將軍吉宗が復元模造を試みたのはこの緒が貴重だったからです。吉宗の復元計画は失敗しました。その後、文化六年（一八〇九）年七月九日から八月一五日迄、江戸（荒川区）の橋場神明神社で神宝開帳の折に、この緒を拝観した尾張藩士真野文五左衛門安重が模造したのです。安重は、「糸打方図註秘訣」「甲冑製作全書」を著した文左衛門安通（道）の子で、真野流の武家故実の研究者です。

さて、文化六年八月中旬、橋場神明神社での開帳を終え帰山の途中、御嶽の神宝は安重邸に立ち寄りしました。その

時の観察をもとに、安重は、六年の間、両面亀甲の組紐を研究模造し、文化一一年九月初吉日に、組紐と共に、組紐の組織図を正確に描き、その経過を記した「奉納の記」一卷（全長355cm、幅36cm）を御嶽山へ奉納しました。

安重は、その中で次のように述べています。「（邸に神宝を迎えて）近ふ居よりて、礼し額、委敷かむがみ奉るに、其多き神たからの中にも、いつのころよりか尊の御腹帯と号へて色糸をもて、さしも妙に組なしたるひらかなる緒のみじかき一筋ぞ有ける。是ぞいにしへには甲冑の緒所（つけ紐）に用ひし物と等しく実々世にも稀なる物也」しかし年を経て長さも短くなり、その緒の中ほどが解き散らしてあった。守護の神職は、享保一九年將軍吉宗が模造を命じたところ組紐師たちが研究のために解き破った痕で、結

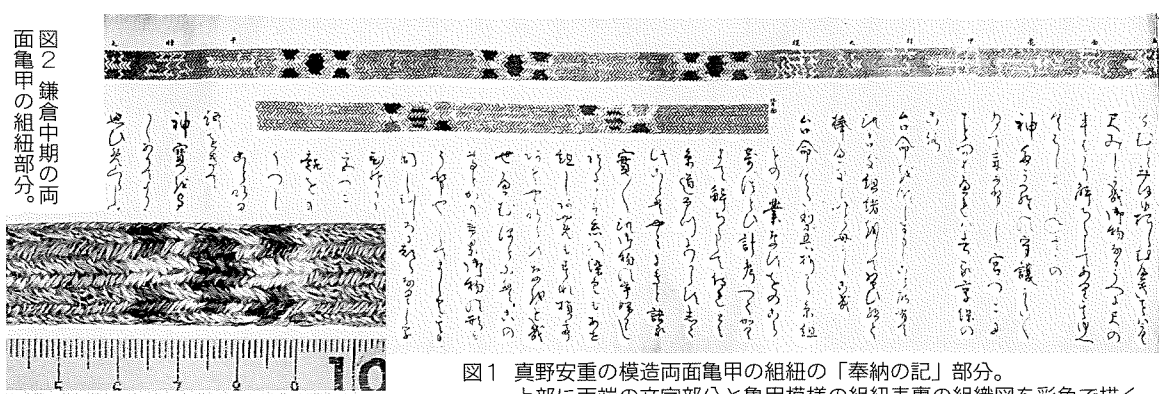


図1 真野安重の模造両面亀甲の組紐の「奉納の記」部分。上部に両端の文字部分と亀甲模様の組紐表裏の組織図を彩色で描く。

局、組み方はわからず模造はできなかつたと語った。安重は将来この両面亀甲の古い緒が破損消滅することを憂え、家伝の組紐の技術も応用、やっ」と「故の糸組の伝にならひて五色の糸を組入御物（御神宝）のごとく亀甲の文とり（模様）を古技法のままにて両の面にうち出して神前に奉納する」と述べ、「つきせじな亀濃あやをうつしてし神のみもの千代のおもかげ」と詠じています。

現在御嶽にのこる鎌倉中期の両面亀甲の緒は、紫裾濃鏡の胴の繰縮緒で「武州御嶽山鏡之図」に一尺三寸残ると記録された部分よりも長くて、長70.5cm、幅1.7cm、厚0.9cm弱、中ほどに享保一九年に解きほどこいた痕が3cm程残り、安重の観察通りです。表に白地に紺と縹の亀甲模様一〇単位、黄地に萌葱の亀甲が一単位、ほぼ3.0cm強の間隔で交互に組

出されます。裏面では逆に白地に紺の亀甲単位の部分が黄地に萌葱の亀甲単位となります。色糸は撚がなく、白・紺・縹・黄・萌葱の五色です。文化六年ごろに刊行の「集古十種」は、両面亀甲の緒をこの五色で描きますが畝数に誤りがあります。萌葱や黄色をまぜるのはこの年代の甲冑の糸組には異例ですが、この鏡の古い耳糸、畝目に萌葱と黄色が入ることを考えると自然で、紫裾濃鏡の糸の色の組合せの基本の根拠として、この古い緒の存在は貴重です。二重になる組糸の上下の芯には四本ずつ八本の麻を組み込んであり、厚さに比して結びやすかつたと思われる。

一方、安重の全長162cmの模造両面亀甲打の緒は、上端60cmは幅1.2cm、萌葱地に「奉納武州金峯山御嶽神寶両面亀甲打之摸」と白糸で組み、下端の53cmに同じく「干時文化六

年巳己八月吉日尾張士真埜（野）平安重謹製」と組みます。裏面の同じ文字は萌葱糸に地は白の組みとなります。さてその間の47.8cm幅1.5cmの部分に表は地が萌葱で白の輪郭に薄紫・紫・紺・萌葱で亀甲模様6単位を組み出す部分です。裏面は表の地色の裏側に模様ができますので五単位です。糸は撚糸です。裏面の同一部分に模様ができるわけではないので、本物とは少し違い、糸も撚り糸です。

しかし、「奉納の記」に、一族の真野安忠が、岩絵具で色鮮やかに細密な組織図を描くなど、その組紐模造への研究心・熱意には頭が下ります。御嶽山の文化財の優秀性と近世の知識人にあたえた感動と知的実践の例として、新・古の両面亀甲の組紐と「奉納の記」を紹介しました。

調査には友人の伊藤博司氏・寺本靖氏の助力を得ました。組紐の知識は寺本氏の示教や鈴木美登里氏、多田牧子氏の高著によります。